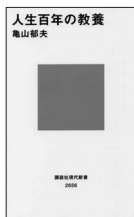


# 「教養」の変遷と現在

## 「カノン」依存からの脱却をめざして



佐藤 宗子



1

今回の特集に際して、総論として依頼されたのは「新しい教養のゆくえ」についてである。ここには、「教養」がすでに存在していたとの含意がある。依頼時の特集趣旨を簡潔にまとめてみよう。すなわち、「子ども向けの「教養書」は、かつて全集や叢書などあるまじりとして形作られ、図書館や学校、家庭に普及して」いたが、「子どもたちに伝える教養の内容も表現方法も、変化を余儀なくされる今日、「子どもたちに、蓄積された知識や文化を受け継いでいくことは、児童文学のひとつの意義でもある」との認識に立ち、「子ども向け教養の本とはどういうものであったのか」、「それは今どうなっているのか」を確認し、「子ども向け教養の本を捉え直すことをめざ」す、とある。

ここには、第二次大戦後の一九五〇年代から六〇年代にかけて普及していた「教養」観が根底にみられるように思う。その一方、ここで捉えられているのはむしろ、五〇年

代に出発が見いだせる「児童文学」の「カノン」ではないか、とも考えられる。「カノン」(canon)とはもともとは聖書の外典に対する正典を指す語だが、転じて標準・基準の意となり、文学批評では権威付けられた文学作品を指す(ハルオ・シラネほか『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、九九など)。その時期から「児童文学」の全集・叢書類で形成されていった「カノン」が「教養書」とみなされるに至ったこと自体、問い直すべきことではあるだろう。

まずは、第二次大戦後の「教養」及び「教養形成」をめぐる変遷を三つの時期に分け、関連する社会の状況などと合わせて概観していくこととする。そのうえで、あらためて現在の時点でそれらを考えていくことにしたい。

2

(1) ひろがる「教養」